

オンライン展示における実践教育とその効果

小野 真嗣*・松崎 夏実**

はじめに

本稿では、大学や博物館におけるデジタルメディアを活用した、オンライン形式の展示会の方法と実践につき、表現教育の視点から、実際に和洋女子大学が取り組んだ2つの事例について、その概要と効果及び課題について述べていきたい。

昨今では博物館をめぐっても、デジタルアーカイブやオンライン展示会といった、世界的なデジタルトランスフォーメーションに則った取り組みが、本格的に必須とされている時代にある。しかし実際には、人と物質とのフィジカルな交わりを重視するそれらの現場において、生産性・持続性あるデジタル化の実現には、いまだ施設ごとによってムラがある。それは、筆者らが所属する人文学部日本文学文化学科文化芸術専攻の様な実践的な創作及び展示活動や、地域社会における現場への働きかけを重視する教育機関においても同様であり、多様な課題を抱えた現場が大半という実情が推察される。限られた設備や機材・人材の中でどのようにデジタル化に適応していくのかについて、本学におけるその実践の一端から考察を試みていきたい。

1. オンライン展示実践への経緯

今回取り上げる事例は、和洋女子大学人文学部日本文学文化学科文化芸術専攻の学生が活動の主体となる、「文化芸術専攻卒業制作

展」と「文化芸術専攻学生制作展『First Step』」である。これらの事例を紹介する前に、日本文学文化学科がとりわけ注視している表現教育と、本専攻のカリキュラムポリシーについて説明する。本学科で履修が可能な博物館学芸員課程は、学科を構成する3専攻のうち、とりわけ文化芸術専攻に履修者が多くみられる。文化芸術専攻の学びの特色は、知識の獲得と知に裏付けられた実践、そしてそれらをプレゼンテーションしていくといった、学びと学びの連結、及び体系性であり「講義科目による知識の習得とその知識を発信していくための演習科目及び実技科目」、あるいは「実技科目の裏付けとなる知識を理論として学ぶ」といった、講義科目と実技科目が両立された学修方針を展開してきた。本稿の主眼となる、実技科目の面からみると、油彩画・テンペラ画といった古典絵画技法、さらにはマンガ創作やPC描画ソフトを用いた先端芸術まで、多岐にわたる実技を学ぶことができる。一方、芸術史や芸術学、文化論を始めとする理論系科目の中には、博物館資料論や博物館展示論といった博物館学科目もカリキュラムに組み込まれている。つまり、実技科目による技術の習得に、美術史や美学といった理論をもって実践を補完し理解を深める。さらには、制作というマインドから視野を広げ、博物館学的に成果物を地域社会にどのように魅せるか、発信していくかというところまで考え抜くことこそが、本専攻の十全な学修といえ、表現教育だと考えている。

*和洋女子大学人文学部日本文学文化学科 助教 **和洋女子大学人文学部日本文学文化学科 学科付職員

そういった学びを循環させていく思考はまさしく、学びを広く展開する使命を持った博物館、及び館を運営する学芸員にとって必須の資質である。それらが本専攻学生が博物館学芸員課程を履修する動機につながるのだろう。

本来であれば「成果を地域社会に発信していく」方法として、大学博物館を利用した学生制作展や、大学近隣の文化施設・ギャラリーを利用した卒業制作展などを通し、展覧会を運営するための一連のノウハウを体験するわけである。しかし、冒頭でも述べたように世界的なデジタルトランスフォーメーションは、もはや我々の日常生活や働き方のスタンダードとなり、博物館を含めた教育の現場においても例は違わず、数年前であれば先進的であったそれらの取り組みも、2022年現在では取り組んでいて当たり前ものとして世間一般に享受されている。そして、そこへ追い打ちをかけたのがCOVID-19である。実際に、文化芸術専攻が例年開いていた卒業制作展や学生制作展は、2020年度から2021年度にかけほとんどが中止、あるいは対面実施に代わる何らかのオンライン措置への移行を余儀なくされた。

そこで我々が踏み切った取り組みが、制作物を収録した動画コンテンツの作成や、オリジナルウェブサイトの設計といった、いわゆる「オンライン展示会」である。

作品や資料、あるいは展示や教育そのものが本来包含しているフィジカルなアイデンティティと、デジタルトランスフォーメーションとの融合を目標とした取り組みとして、文化芸術専攻の2020年度卒業制作展と、2019年度及び2020年度の学生制作展におけるデジタルメディアを活用した双方のオンライン展覧会について、具体的な手順や課題と併せて紹介していく。

2. オンライン展覧会の手法を用いた具体的事例

(1) 卒業制作展

まず第一の事例は、大学近隣の文化施設やギャラリーにて実施していた、卒業制作展である【写真1】。卒業制作ではただ作品をつくりあげるだけでなく、展覧会の運営や展示業務といった行程を学生自らの手で手掛けること、それを本専攻では表現教育の一環として重視してきた。2020年度の卒業制作展についてもこれまでにない、1月下旬から2月初頭にかけたギャラリーでの卒業展覧会となる予定であったが、COVID-19の影響によるギャラリー閉館に伴い、急遽展示に代わる公開手段を講じる必要が生じたのである。



【写真1】卒業制作展(2018年度)

この異例の事態に、多くの大学や発表団体が頭を抱えただろうが、大学が母体となる卒業展覧会等がオンラインでの実施となるケースは、なかなか例が見当たらず、我々のオンライン展示準備も企画の設計や具体的な段取り、必要な機材や備品、スケジュール的な制約なども含め、すべてが手探りの状態からその取り組みは始まった。

公開形態については、最終的な結果として、作品及びその解説動画を掲載した卒業制作展用特設オンラインサイトを作り上げることとなった(以下、オンライン展示と呼ぶ)。

決定に至るまでは、基本的にゼミ内の学生及び指導教員・学科付職員を中心に協議を重ねてきたが、あくまでも学生主体で展示を作り上げるといふ、本専攻のカリキュラムポリシーは保たれなければならない。オンライン上で作品を発表するための最も簡便で作業コストのかからない手段としては、撮影した作品の写真を、記事と併せて大学ホームページに掲載する方法だろう。しかし、大学のホームページは美術鑑賞を目的としたユーザーインターフェースで設計されているわけではないため、サイトの構成上、学生一人一人へのフォーカスやきめ細やかな編集が困難となる。さらに、大学の公式YouTubeチャンネルに、制作者本人の実写もしくは音声による解説を付けた5～10分の作品動画の制作案も挙げられたが、学生本人の出演については、当人の心理的なハードルも高く、さらには、個人情報取り扱いに関するインターネットトラブルのリスクも大いに懸念された。

このような実現にかかる制約と表現教育の目的とのせめぎあいの中で、さまざまなリスクやシステム的な障壁を回避しながらも、展示会をオンライン上で柔軟にプレゼンテーションするため考案された公開形態が、卒業制作展用特設サイトの設計である。現在はデジタル化社会が謳われるだけあって、プログラミング等の専門的な技術を学んでいなくとも、一定のクオリティの保たれたオリジナルウェブサイトを自作できるアプリやソフトが充実している。今回使用したのは、「WIX」という無料のホームページ制作ツールである。HTMLの知識等は必要なく、リンクやURLの基本的な仕組みが理解できていればかなり直感的に取り扱うことができ、学生の多様なアイデアを柔軟にデザインすることが可能である。今回、特設サイトのデザインや動画のディレクション、そしてそれらにかかる資料の撮影についても、スチル・動画(クローズアップやパンのカット)を含め、教職員を

含めたゼミ内での仕上がりとなっている。次では、サイトの作成過程や、構成されるスチルや動画コンテンツのつくり方について説明していきたい。

①特設サイト

サイトの構成としては、「ホーム画面」・「ゼミの概要紹介」・「ギャラリー」・「問い合わせ」の全4ページからなる。「ギャラリー」が卒業制作本体の掲載ページとなり、ゼミ生それぞれのページに分岐して飛べるようリンクの設定がされている【写真2】。



【写真2】卒業制作展オンライン展示①

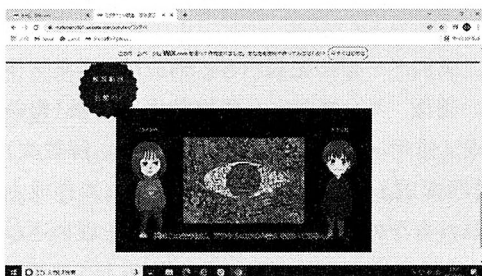
個別ページの掲載内容の構成は、卒業制作の画像、キャプションに掲載する情報(作品名、使用メディア、作品サイズ、解説文)【写真3】、さらには学生の手によって作成された自身の作品に関する解説動画を埋め込んだ【写真4】。動画に関しては、ホームページ自体には埋め込み可能な容量に制限があるため、今回は動画アップロードサービス「YouTube」へアップし、そのリンクを埋め込む方法をとった。また、「WIX」はPC・スマートフォン双方のデバイスに対応しており、デバイスによって詳細にテキストやメディアの配置を調節することができる。

「WIX」の留意点としては、ドメイン取得に関することが挙げられる。ドメインとは、ネットワーク上のコンピューターやサイトを識別するための住所の様なものであり、具体的には編集し、発行されたサイトのURL末

尾につく (https://〇〇.wixsite.com/△△【ドメイン】) 部分である。ドメインを取得することで、インターネットを通じてどこからでもアクセスすることが可能となるが、今回はドメインの取得をせず大学ホームページにURLを掲載し、基本的には大学HPを閲覧したものが特設サイトまでアクセスできるよう、限定公開の仕組みとした。公開範囲に関する措置とその理由については、後程閲覧数等の結果と併せてまとめて説明することとしたい。



【写真3】卒業制作展オンライン展示②

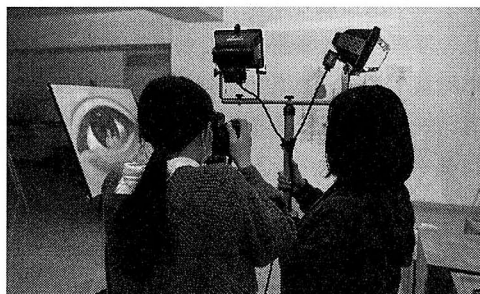


【写真4】卒業制作展オンライン展示③

② スチル・動画の撮影方法

作品自体の静止画(スチル)にはデジタル一眼レフカメラ、動画にはスマートフォンを使用し、場合によってはAdobe Photoshopを用いた色調の調整・トリミング等の簡単な編集を行った。撮影では、普段授業で使用している実技教室の白い壁面を背景として利用した。スチルを撮影するにあたり、当初はライトやバックなど、撮影に適する機材が不十分であったため、撮影後の微調整によって補完する必要

があった。特に作品現物そのものを重視するファインアート系の作品は、撮影のフェーズが最も注意を払うべきポイントであり、カメラ・PC・スマートフォン、それぞれによって微妙に異なる色の調子の差異について慎重に検討しながらスチルを作成していった【写真5】。



【写真5】卒業制作展資料撮影①

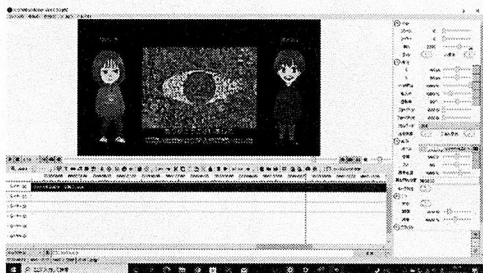
同様に、動画においても撮影に必要な用具はほとんど準備がないに等しく、学生の知恵と工夫による人力ですべてを作り上げたといっても過言ではない。例えば、作品をより詳細に映すためにズームやパン等の技法で撮影を行うが、手で撮影すれば手ブレや傾きが生じる。カメラの水平補正機能やアプリを用いても、完全に均一なカットを撮影することは難しく、そこで考案されたのが台車の活用であった。三脚に設置した撮影機材をさらに台車に固定することで、滑らかで安定したカットの撮影が可能となった【写真6】。



【写真6】卒業制作展資料撮影②

③動画の編集方法

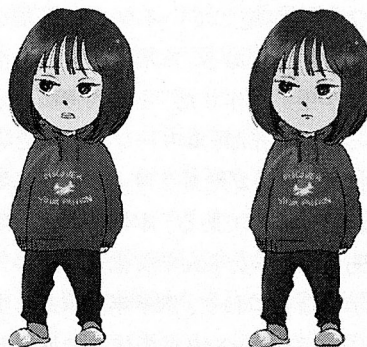
今回制作した動画について最も特徴的なのは、学生を模したキャラクターたちが、音声合成ソフトによって話す、音声付きの解説である。【写真7】のように、両脇に学生が2キャラクターずつ配置され、互いにインタビューをするような形式で制作の動機や制作過程、作業上でのこだわりや苦心した点について語っている。こちらの編集に関しては、作品自体及びBGMの編集を「PowerDirector」、キャラクターのアニメーション及び音声合成を「ゆっくりMovieMaker」というソフトを用いて作成した。予めゼミ生全員から、制作の動機やこだわりのポイントについてアンケートを集め、それをもとに2名の学生が対話をする台本を制作する。編集の順序で言えば、この台本に合わせて作品自体の撮影（カットの割り方や尺、クローズアップ部分やそのタイミングなど）も決まってくるため、作業行程の管理やスケジューリングが重要であることは言うまでもない。それらの撮影した作品のカット、及びBGMを「PowerDirector」にて編集した後、「ゆっくりMovieMaker」によってキャラクターのボイスを創作する。こちらのソフトでは、声の高さや声質、話す速度を詳細に調節でき、それぞれの学生のアイデンティティを創造することが可能となる。



【写真7】ボイス創作と調整

そして、学生を模したイラストを、口の開閉の違いで2差分用意すれば、打ち込んだ文

章（音声）に合わせ口がバクバクと動く仕組みとなる【図1】。



【図1】キャラクター発声作業

このような動画を作るに至った動機としては、作品そのものだけでは語りきれない制作の意図や作業過程を、自らの口から言及したいという学生の望みがあったからである。その方法としては、インターネットで公開することを鑑み今回は協議したうえでイラストレーションと音声ソフトの活用という形をとった。

会場による展覧会であれば、学生が受付や管理・運営の業務を行い、来館いただいた方々にも自身の作品の解説をしたり、来館者の方とともに作品を鑑賞したりすることによって観者の鑑賞を深め、また制作者には多様な視点のヒントを与える。展覧会とは、両者にとって互いの経験をより豊かにするための、双方向のコミュニケーションの場であるべきである。今回の展示では、制作者の意図や作業過程に関する解説動画を付与したが、来館者とのコミュニケーションを図る点での改善を次回以降の課題としたい。

次節では、このようなデジタルコンテンツを制作するためのノウハウを実践的に学ぶ演習科目にフォーカスを置き、2021年度の実

践事例を考察しながら、今後の表現教育における展望について言及していきたい。

(2) 文化芸術専攻学生制作展「First Step」

続いての取り組みは、文化芸術専攻が年度ごとに毎年実施している学生作品展、通称「First Step」である。本専攻の実技・演習科目にて学生が制作した、主に油彩画や水彩画といった平面作品、レリーフや陶芸といった立体作品、マンガやグラフィック作品等で構成された制作展である。本学付属の大学博物館である、和洋女子大学文化資料館の一角での展示となっており、例年年度末から翌年度初めにかけて30~40点の作品を展示している。やはり卒業制作展と同様に、自らの作品を自らの手で発信していくため、展示準備に学生たちが積極的に関わっている。

大学博物館での展示は、小規模のギャラリーや公民館等で行う展示とは、設備面や専門的な用具といったさまざまな面で少しずつ性質が異なり、学芸員課程を履修するものであれば講義での学びを実践的に体験する機会として、4年次に控える博物館実習に向けての貴重な実践現場となる。しかし、2019年度「First Step」は、展示準備まで行ったものの、COVID-19の流行により資料館での展示は中止となった。その際教員・職員によって代替のオンライン展示を行うこととした。そして、やはり2020年度展も感染状況は好転することなく、作品の公開はオンライン上で行われることとなったため、2019年度のノウハウを活かしたオンライン展示の手法を学ぶ演習科目の設定を行うことになったのである。

COVID-19の猛威により、展覧会の形態は大きく姿を変えた。そこで我々は、それらのための実習や教育活動も、そのあり方を柔軟に対応させる必要があるのではないだろうかと考えた。我々は、卒業制作展のオンライン展示の取り組みや前年度の「First Step」オンライン展示から得た経験をもとに、オンライ

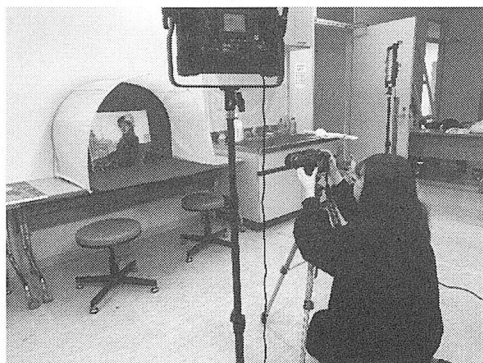


【写真8】和洋女子大学文化資料館での「First Step」展(2018年度)

ン展示の手法を実践的に学ぶことを、演習科目「表現特殊演習Ⅰ」で行った。具体的には、インターネットでの公開を前提とした、作品紹介のための動画コンテンツを作成する手法の体得を目的とし、大まかな作業のセクションとしては、①作品のデータ化、②動画編集技術の獲得、③動画の実践的なデザイン、となる。

①資料のデータ化

まず、資料となる作品の写真撮影である。今回は、小さな作品を撮影するための背景セット及びLEDスタンド型ライトを使用した【写真9】。



【写真9】「First Step」資料撮影

平面作品を撮影する際に最も困難な点は、光を作品全体へ均一に当てる手法である。特

に油絵などは絵肌が光沢しているケースが多く、作品の上部と下部で光の当たり具合が異なっているとそれが如実に出てしまう。今回用いたセットでは、レフ版の効果をもたらすシートをドーム状にセッティングし、そのシートに向けてライトを当てることによって、全体にまんべんなく自然な明るさを作り出すことができた。また、カメラの機種によって異なる、写し取れる色の得意不得意やトーンズズレといったハード上の障壁を、肉眼での認識とすり合わせながらのこまめなライティング調整が大変重要となる。同様に、取り込むデバイスの機種によっても、撮影の際にカメラ内で確認できる情報とデバイスで表示される情報とで差異があるケースがほとんどであるため、一つの作品につき明度の諧調を3パターンほど分け撮影しておく、画像の選定がスムーズになるだろう。

このようなケースに必要な撮影技術は美しく芸術的な写真を切り取る技術ではなく、現実の物体を限りなく正確にデータ空間に抽出する意識である。写真の撮影のみならず、画像の加工や編集すらも誰もが手軽に行える時代となりつつあるが、様々な編集機能を前にするとどうしても過剰な演出になりがちであり、特に編集ソフトの既存のフィルターや、カメラの特殊な撮影モードはむやみに使用すべきでない。しかし、無編集であることが現物と等しくあるわけでもなく、肉眼による認識とカメラによる認識の差異を理解できているかが重要である。こういった繊細な感覚と技術は、言葉や文章による説明で理解できるものではなく、実践と経験を繰り返すことで徐々に会得していくものだ。学生一人一人が撮影機器、そして資料や作品といった現物に対し、自らの五感を以って実際に触れることで、初めて知識はその身に定着するのである。

②動画編集技術の獲得と動画のデザイン

動画の実践的なデザインに使用したソフトは、前節同様に「PowerDirector」となる。ソフトに触れる実習については、教員が一連の使用方法をレクチャーした後に、学生一人一人が実習に当たった。当初の予定であればその後、動画の構成やデザイン等をグループワークによって行っていく予定であったが、COVID-19による対面授業の自粛により、やむを得ず自宅での個人作業と教員による遠隔指導という形となった。よって、学生が手掛けたそれぞれの動画作品から、匿名のコンペティション形式で優良な作品を3点選出し、その作品のデザインやギミックを総合的にまとめ、「YouTube」への公開に至った【写真10・11】。



【写真10】「First Step」オンライン展示①



【写真11】「First Step」オンライン展示②

編集作業や機能の理解については、最低限Adobe関係の編集ソフトに触れたことがある者であれば、多少ソフト特有の用語やシステ

ムはあるものの、専門的な予備知識をもちあわせていなくともスムーズに作業へ取り組めているように見受けられた。

また、このような動画コンテンツの制作とインターネットを介した公開において指導に気をつけなければならないのは、著作権関連だろう。動画に使用する画像やBGM等素材における著作権の所在や、使用する際の規定の有無等についての確認を怠ってはならない。

このような動画の作成から公開の作業にかけては、一つ一つは簡単な作業であるが、実際に行動に起こすと、その行程の多さと細やかな確認事項に対する注意が容易でないことが、今回の演習において学生には体感できたのではないだろう。



【写真12】2020年度「First Step」展リーフレット（一部加工）

3. オンライン展示及び実践教育とその効果

(1) 視聴数からみるオンライン展示の効果

2020年度卒業制作展のオンライン展示を公開した期間は、2021年3月1日から3月18日の18日間である。無料ホームページ制作サービス「WIX」では、サイトの閲覧履歴や滞在時間などのトレースが可能となっており、実施期間中のアクセス記録を下記にまとめた【表1】。卒業制作の作品は展示会場での公開はともかく、インターネット上に掲載することを前提として取り組まれた作品ではないため、閲覧者層についてはある程度ターゲットを絞っている。このようなインターネットやSNSを利用した創作物の公開及び宣伝活動は、先を見据えた慎重な戦略があってこそ功をなすが、昨今の情報拡散力は到底こちらがコントロールできるものではなく、予測できないネットトラブルのリスクも同時に抱えることとなる。よって、ターゲットは既卒・在学中の学生や、本大学の受験希望者に向けたこととし、その措置として前述したように、ドメイン無設定の特設サイトURLを大学ホームページ内に掲載したり、リンクを付したダイレクトメールを本専攻OGと大学関係者に限って送付したりするという範囲を限定しての広報活動であった。

さて、これまでの従来の形式による展覧会では、4～5日間程度の会期のうち、おおよそ200人前後の来場者が確認できた。それが、今回のオンライン展示では少なくとも503人のアクセス、さらにはその中から繰り返しサイトを訪れ閲覧している様子も見受けられる。公開から5日間程度が最も閲覧者の多い時期で、16日からの3日間で再度閲覧者が増加したのは、本学が使用しているLMS(学習管理システム)を利用し今一度本オンライン展覧会につき呼びかけを行ったため、在学生の閲覧が増えたのだと考えられる。しかし、いずれにせよ、従来の展覧会以上の方々に関

	年・月・日	ページビュー	サイトのセッション数	ユニーク訪問数	サイト直帰率	平均セッション時間
数値の説明		サイト内のページを行き来した回数	サイトへのアクセス数の総計	左同 (同デバイスからの複数アクセスを除く)	ログイン後、ページの移動をせずにログアウトした確率	サイトログイン後の平均滞在時間
	2021-03-01	315	59	50	22.00%	03m 30s
	2021-03-02	512	97	87	26.00%	03m 23s
	2021-03-03	392	45	37	20.00%	04m 06s
	2021-03-04	216	28	25	11.00%	10m 23s
	2021-03-05	378	48	43	17.00%	06m 53s
	2021-03-06	164	27	25	30.00%	06m 59s
	2021-03-07	37	10	10	20.00%	02m 07s
	2021-03-08	101	25	25	32.00%	02m 53s
	2021-03-09	118	20	17	35.00%	04m 33s
	2021-03-10	110	20	20	30.00%	01m 20s
	2021-03-11	82	12	12	25.00%	08m 50s
	2021-03-12	65	10	10	10.00%	03m 23s
	2021-03-13	45	9	8	11.00%	03m 59s
	2021-03-14	14	5	5	40.00%	01m 16s
	2021-03-15	85	12	8	42.00%	12m 42s
	2021-03-16	243	51	44	20.00%	02m 27s
	2021-03-17	323	53	50	21.00%	02m 50s
	2021-03-18	283	32	27	22.00%	17m 43s
合計／平均	18日間	<u>3,483</u>	<u>563</u>	<u>503</u>	24.11%	05m 31s

【表1】卒業制作展オンライン展示の閲覧数・滞在時間等データ

覧していただけたことには違いない。これは会場まで足を運ぶ必要のないオンライン展示の利点といえる。アクセス数自体は確実に従来の展覧会よりも増加したものの、気になるのはサイトの直帰率と平均滞在時間であり、こちらは対面の展覧会であればあまり見られないような数字である。このような数値の結果から、インターネット上での展覧会において、閲覧者にとっての手軽さとは「とっつきやすさ」でもあり「手放しやすさ」でもあることが言えるだろう。それは鑑賞者の意識レベルのみの問題ではなく、インターネットを介した表現・展示技術の不足や、絵画や立体作

品といった発表物とデジタルの相性といった根本的な原因もある。発表と鑑賞、双方の質を保ちながら、オンライン展示という対面の展覧会に代わるそれをつくりあげることが次回以降の課題といえる。

学生らが自らの手で取り組み、運営したことによって実体験となったのは、彼女達にとって大変大きな経験となったであろう。また、自身たちがこれまで手軽に触れていた、ウェブサイトやSNS、動画といった様々なデジタルコンテンツを制作することにかかる時間や労力について、身を以て体感したといえる。

(2) 授業としてのオンライン展示取り組みの 効果

前述したように、2020年度の「文化芸術専攻学生制作展『First Step』」はオンライン展示会方式で行われることとなったため、その制作を筆者が担当する「表現特殊演習Ⅰ」の授業内で行った。「表現特殊演習Ⅰ」は文化芸術専攻の選択必修科目であることから、履修者のほとんどは文化芸術専攻生である。文化芸術専攻では、専攻の専門領域の一つに博物館学があるため、多くの学生が学芸員課程を履修しているという状況にあり、筆者が担当する「表現特殊演習Ⅰ」では、博物館学関連の授業内容となることが多い。

和洋女子大学の学芸員課程の授業では、オンライン展示に関する実習は行われていないため、今年度の授業テーマとしてオンライン展示制作を実際に経験してもらうことを選んだ。

個別に「文化芸術専攻学生制作展『First Step』」のオンライン展示制作に関する学生アンケートは実施していないが、授業に関する学生アンケートにおける当授業の評価は平均以上の評価を得ており、前述したように授業期間途中から一時遠隔授業で行ったにもかかわらず、一定の評価を得た背景には、学生が望む技術の享受を果たせたものと考えられる。このようなオンライン展示の制作技術は、現代社会において学芸員以外の職種についていた際も非常に有効な技術であろう。小規模博物館はもちろんであるが、その他の小規模事業者においてもオンライン関係の専門家がいることは少なく、本専攻のような学問領域を有する学生には、オンライン分野の職務を求められることが多いと考えられる。そのスキルを少しでも学んでおくことは、社会へ出た際に役立つことであろう。

(3) 地域社会への波及効果

本学のみならず、大学の地域社会との連携

は非常に重視すべきテーマである。生涯学習社会における大学の役割を大学単位で果たしていることは、もはや当然のことになっており、筆者も明治大学のリバティアカデミーや和洋女子大学の地域連携公開講座などに参加しており、明治大学リバティアカデミーの講座については小論を執筆している⁽¹⁾。

しかしながら、教員個人がゼミ単位で行っているものを除くと、学部・学科あるいは専攻で地域社会連携を行っていることは、大学単位に比べるとかなり少ないといえるのではないだろうか。和洋女子大学日本文学文化学科も地域社会連携についての取り組みが進んでいるとはいえなかったが、2020年度より学内の教育振興支援助成を受け、「文学と芸術を通じた地域社会参画型表現教育プログラム(SERIAL: Socially Engaged expression-Related Education of Arts and Literature)」を実施している。このプログラムは、日本文学文化学科の核である「文学、芸術、文化」を軸に、学生たちが表現や創作を通じて地域社会に参画し、協働・連携関係を築くための教育プログラムを開発し実施するものであり、地域社会の発展と課題の発見・解決に資する企画立案と実行(いわゆるPBL)を学生主導で行うものである。

上記のプログラムに筆者らも参画しており、地域社会連携の方法を模索していたが、今回の卒業制作展および「文化芸術専攻学生制作展『First Step』」のオンライン展示は、その画期となるものであると考える。前述したように、卒業制作展は和洋女子大学のホームページのみの告知であったのかかわらず、例年の卒業制作展の来場者の2.5倍以上の閲覧数があった。閲覧の様子についてはさまざまな問題があったことは先に述べたが、少なくとも一定数の人数が「手軽」に閲覧できるというオンライン展示の効果があったことは間違いない。たとえわずかな時間の閲覧であったとしても、イベントの存在を知り関

心を持った故の閲覧であり、最初は「イベントの存在を知ってもらう」・「関心を持ってもらう」ということが肝要であるといえるのではないだろうか。この点については今回の試みは一定の成果を挙げたといえ、これまで関心を持っていなかった層を取り込む手段としてオンライン展示という手法は有効であることが確認できたと考える。

2021年度は、現在(1月上旬)のところで卒業制作展を会場にて行う予定であるが、同時にオンライン展示も継続して行うこととなっている⁽²⁾。また、2022年度以降も会場展示とオンライン展示の両方を継続して行うことにしており、「文化芸術専攻学生制作展『First Step』」も同様である。2021年度卒業制作展からは、近隣の中学校・高等学校や、図書館・公民館等の社会教育施設へのポスター掲示とリーフレット配布を行う予定であり、これらの展覧会から文化芸術専攻の学修を地域社会に知ってもらうことを始めとして、専攻単位の地域社会連携を図って行くことを計画している。その結果については、稿を改めて報告したい。

おわりに

本稿では、大学や博物館におけるデジタルメディアを活用した、オンライン形式の展覧会の方法と実践につき、実際に和洋女子大学が取り組んだ2つの事例について、その概要と効果及び課題について述べてきた。

和洋女子大学の場合は、COVID-19の影響によりオンライン展示を行う必要性に迫られ、そこで得られた技術と成果を博物館学関係の授業科目に活かすことができた。さらにそこから地域社会連携を図る取り組みへと続いていくことになった。

しかし、その取り組みは地域博物館が行うべき取り組みとまさに同じといえるであろう。現在、地域博物館にとってもオンライン展示や、それを活かした地域社会連携活動は

必須のものである。その時代ごとへの適応に積極的に踏み切る行動力や、イレギュラーな状況に置かれたときに自らの持つ知識や技術を柔軟かつ機動的に生かす能力は、現場主義的な性質をもつ地域の博物館や小規模の機関などにおいては、何よりも重要視されるスキルである。学芸員課程でのカリキュラムにも、その時代その時期に必須と思われる知識・技術を習得する機会を設けることが必要なのではないだろうか。

【付記】

ご自身が担当する授業科目の集大成である卒業制作展ならびに「文化芸術専攻学生制作展『First Step』」のオンライン展示に関する本稿の執筆をご快諾いただいた和洋女子大学人文学部日本文学文化学科中村威久水先生に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

注

- (1) 吉田優・小野真嗣「大学の生涯学習講座における博物館普及教育活動の実践研究」(『明治大学学芸員養成課程紀要』第29号、2018年)。
- (2) 本稿校正段階において、2021年度文化芸術専攻卒業制作展は2022年1月20～23日の期間で無事開催することができた。その間1月21日からは千葉県でまん延防止等重点措置が実施され、それに伴い和洋女子大学の「COVID-19に対する事業活動の基準」も「レベル2」(対面型イベントは原則中止または延期)となったが、学生の活動制限や感染対策の徹底を図ることで大学側から開催の許可を得、200人以上の来場者を迎えることができた。また、オンライン展示も実施しており、こちらは現在(2022年2月末)も公開中である。

Practical Education and its Effectiveness in Online Exhibitions

ONO Shinji
MATSUZAKI Natsumi

In this paper, I have outlined the methods and practices of online exhibitions using digital media in universities and museums, and have described the outline, effects, and challenges of two cases in which Wayo Women's University actually took part.

In the case of the Wayo Women's University, it was followed by an effort to promote cooperation with the local community, which is exactly what a regional museum should do. A curator is an occupation that requires the ability to take active steps to adapt to the times, and the curriculum of the curatorial training programs that produce curators includes the following

The curricula of curatorial training programs that produce curators also need to provide opportunities to acquire knowledge and skills that are considered essential at that time and period.